午後１時30分　開始

【広報広聴課長】　定刻の時間となりましたので、ただいまより８月市長の定例記者会見を始めさせていただきます。

最初にお知らせを申し上げます。記者クラブの方に異動がございました。それで、本日初めてこの会見に参加されます方をご紹介申し上げます。

最初に、福井新聞嶺南代表、広瀬様でございます。広瀬様、一言お願い申し上げます。

【記者】　福井新聞広瀬でございます。有意義な会見になりますよう、よろしくお願いします。

【広報広聴課長】　ありがとうございました。

続いて、中日新聞の立石様でございます。立石様、一言お願い申し上げます。

【記者】　中日新聞の立石です。いろいろ勉強させてください。よろしくお願いします。

【広報広聴課長】　ありがとうございました。

毎回申し上げておりますが、この会見につきましては、市のホームページ上で公開するなどにより録音をいたしております。発言の内容をより鮮明にするために、必ず発言の場合はお手元のマイクを使用しての発言をお願いしたいと思います。また、発言の際にはマイクのスイッチを入れて発言をお願いするとともに、発言が終わりましたならスイッチを切っていただきたいと思います。なお、マイクのスイッチはマイクの下のほうにあります銀色のボタンとなっております。何とぞご協力のほどお願いいたしたいと思います。

本日の進行につきましては、お手元の配付の次第のとおり、最初に市長のあいさつ、その後、事業発表をいたします。質問につきましては、最初は事業発表についてお願いしたいと思います。事業発表の終了の後に次第の３番目、フリーの質疑応答へと進行したく思っております。終了は14時30分、午後２時30分を予定いたしております。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

それでは、市長、よろしくお願いいたします。

【市長】　それでは、もういよいよ８月ということで、定例記者会見になります。記者の皆様方には大変お疲れさまでございます。

なかなか梅雨が明けないということで、昨日、何か名古屋方面、また大阪も明けたということでありまして、恐らくこの北陸も、もうそう遠くない時期に梅雨明けするんじゃないかなというふうに思っておりますが、私ども夏の観光というのが非常に大きな、観光客の受け入れの大切な時期でありますけれども、浜茶屋等を中心にして、非常に冷夏といいますか、梅雨が明けないという影響が出ておりまして、大変心配もいたしております。一日も早く梅雨が明けて、からっと晴れて、多くの海水浴のお客さんをお迎えしたい、このようにも思っているところであります。

今回の提供話題、３つございますけれども、特に開港110年ということで、後ほど花火大会出ますが、一昨日もクルージングということで大変好評もいただきました。海の魅力を十分に発信をしながら多くのお客さんを迎えていくということは非常に大事だなということも痛感したわけでありまして、今後ともいろいろと施策を練りながら頑張ってまいりたい、このように思っております。

あとは座って発表させていただきます。

まず、発表項目の第１点であります。

第60回とうろう流しと大花火大会であります。日時は、もう恒例であります８月16日。今年は日曜日になったところであります。特に、花火大会が60回、開港110周年ということで、私も港町敦賀にふさわしい花火大会にしたい、このように思っております。細かいところは記載のとおりでございます。

続きまして、シンガポールにおけますポートセールスについてであります。

先月の８日から11日、２泊３日ということでありましたけれども、シンガポールの船会社５社、マリーナエクスプレスとか、ＷＣＬとかＺＩＭとか、前回資料をお配りした会社５社の訪問をしたところでございます。また、港湾管理者、そしてまたジェトロ、そこに訪問をしました。

シンガポールというのは本当にすごい港湾でありまして、今、世界一の港湾取扱量がありますし、現場の港も訪問させていただきましたけれども、１隻の船で敦賀の１年分以上

のコンテナを積んだ船がいるというような状況。そして、コンテナも、あそこは風が余り吹かないというところらしく、また地震もないということで、コンテナが７段も８段も積んであるんです。要するにビルみたいにコンテナが積んでございました。そういうようなところと敦賀と余り比較するには寂しすぎるというような、非常に大きな港でありましたが、それぞれの船会社も、特にシンガポールあたりの大きな船会社というのは、北米へ行く船というのはほとんど日本海側を通っていっているということでございまして、そういう意味では敦賀から船で行くと４時間ぐらいで敦賀に寄れる距離を航行しているということであります。いろいろ説明をさせていただく中で、なかなかおもしろい話になるなという、結構関心を各社とも示していただいたところでございます。

その１社が、間もなく敦賀を一度見たいということで、日本の東京支社長が来ていただけるということに実はなっているところであります。

ある程度の成果は、私ども上がったなというふうに思っておりますし、やはり荷物がどのようになるかといういろいろな調査もございますし、１点、やはり今の港湾のガントリークレーンがちょっと小さいなという実は指摘を受けました。先ほども言いましたように、何万トン、５万トン、６万トンというコンテナ船になりますと、かなりの量も積んでいますし、今のガントリークレーンでは、要するに船まで届かないんです。もしやろうと思うと、今度は船を回転して、要するに右側にとめたやつを反対に回せばとめれるんですけれども、そうするとまたその費用が非常にかかるということで、そのあたりの指摘も実は受けたところでございます。

将来的に、本当に大きな船が入り、また荷物を集められることができれば、そういうことも研究しなくちゃならんなということも感じてきたところでありますし、将来的にこれだけの大きな港ができてくるわけでございますので、ぜひそのようなことの可能性を探る、そして、私どもの一つのポテンシャルとすれば、今、北海道にあれだけの中京、関西からの荷物が出ているわけでありますし、それを逆に北米へ行く荷物を敦賀に集荷をするということは決して不可能ではないということも感じてまいりましたので、それなりの成果は上がったというように思いますし、今後ともそういうポートセールスをしっかり行いながら、敦賀の港の活性化につないでいきたい、このようにも思っているところでございます。

シンガポールというのは、やはり、アジア地域の総括本部を置いている企業が大変多くあります。やはり、アジアの物流を把握する上で非常に重要な拠点であるわけでありますので、今後とも注目をしながら努力していきたい、このように思っているところであります。

次に、３番目であります。

ナホトカの友好親善使節団の受け入れということで、８月30日から９月６日間、ナホトカのコリャディン市長、またピリペンコ議長、またいろいろな港湾関係者等々、合計６名の方が訪問されまして、敦賀まつりのちょうど時期でありますので、ぜひ敦賀のお祭りを見てみたいというようなことでお越しになるところであります。

私のほうからは以上です。

【広報広聴課長】　ありがとうございました。

それでは、ただいま市長から発表いたしました３項目について質問を受けたいと思います。

最初に、幹事社さんのほうからお願いいたします。

【記者】　主催は観光協会になっていますが、あえてお聞きしたいんですが、とうろう流しと大花火大会、昨年開催する時期というのは、ちょうどあのテントの事故の直後だったことがあって、警備員増強するとかそういう対策を打ち出されたと思います。この前、テント、１年たちまして。今年、何かあの事故の教訓を踏まえて、例年ではない対策みたいなとられることがありましたら教えていただけますか。

【市長】　特に花火大会は、例の明石の花火大会の事故がありましたから、それ以降は実はかなり警備体制を強化をしております。

昨年の事故の教訓といいますと、やはり風関係もあったものですから、テント等がなるべく飛ばないようにというそのような対策も昨年既にとっておりますので、今年は昨年と同様、そういう対策、また明石のああいう多くの皆さん方が移動したときの事故を教訓と

した対策はこれからもとり続けていきたいですし、安全対策につきましては、観光協会、また市も十分に体制をとっていっているところではあります。
【記者】　昨年のお話だとおもりをどうするとか、あと警備員をどこどこ増やすとか、そういうお話をいただいたと思うんですけれども、それは昨年並みということでいいですか。
【市長】　昨年と同じ警備体制です。
【記者】　シンガポールの件なんですけれども、１社が興味を示してくれて東京の支社長が敦賀に来ると。それは何か具体的な、敦賀に入港するという話をもう具体的にしに来るということなんでしょうか。
【市長】　いや、まだそこまでいっていません。やはり一度敦賀をじかに見たいということのお話でございまして、またこちらの港湾関係者との話もあるというように思います。これは１社じゃなくて、ほかにも実は興味を示していただいていますので、前もここでこう言ったんですけれども、たくさん、複数来たらどうすると、それはもう早いもの勝ちですねとは言うてはおいたんですが。結構私どもが行く前に、思ったよりは反応も良かったものですから、それなりの成果が上がるように、これからは最善の努力をしたいと思っています。
【記者】　それに関連しますけれども、それ、船会社の人が興味を示しているんですか。
【市長】　はい。
【記者】　そうですか。
　今度また話が変わるんですけれども、花火の数というのは去年と同じ発の数なんでしょうか。
【市長】　１万3,000発は昨年と一緒だと思います。
【記者】　全国各地で不況と言われている中、花火大会を縮小したりとかいろいろ考えているところもあると思うんですけれども、特に見直したとか、例えば大きさを小さくしようとか、何かそんなのは特に何も変わっていないんでしょうか。
【市長】　本来ですと、先ほど言いました花火大会60回、開港110周年ですから倍ぐらいしたいとは思ったんですけれども、それを抑えて昨年並みにしたということであります。
【記者】　了解です。ありがとうございました。
【広報広聴課長】　ほか各社、発表項目について質問がありましたら挙手をお願いいたします。
【記者】　シンガポールの件なんですけれども、先ほどガントリークレーンの大きさとか課題も出たんですが、それとは正反対に関心を示してくれた、うち１社が視察に来るという中で、どのような点が現在、市長が行かれて、その船会社が、どこに、敦賀港のどういう点に注目されたんでしょうか。
【市長】　まず、ガントリークレーンは別として、非常に大深水の天然の良港である。要するに５万トン、６万トンの船も十分に入れる規模がある。それと、中京、京阪神に非常に近いという地理的なものと、これは十分私どももパソコンのパワーポイントで、ＤＶＤ等も作りまして十分紹介をしてまいりましたので、そのあたりである程度関心を持ってくれたんじゃないかなというふうに思います。
【記者】　やはり現在の多目的国際ターミナル、水深がかなり深いという、あの辺が功を奏したということも考えられると。
【市長】　極めて大きな船の航行を扱っている船会社なものですから、そういう意味では十分接岸もできるし、というそういうあたりはやはり功を奏したというように思います。ほかに日本海側ですとなかなかそれだけの大きな港というのは現にないものですから、そういう意味では敦賀は優位性があるんかなというふうに思っています。
【記者】　ガントリークレーンが小さいというふうなちょっと指摘を受けたということですけれども、これは、今、県が整備を進めているクレーンでも小さいということなんでしょうか。
【市長】　要するに、今計画しているクレーンでは小さいなという指摘を受けたところであります。船の大きさにもよりますから、その船会社といいましても大から小までいろいろ持っていますので、そういう点で対応できるやつもありますけれども、やはりちょっと大型になると小さいなという指摘は受けました。

将来的にもしそういうことが可能であり、船が入るようになれば、またガントリークレーンも新しく設置をしなくちゃならんようになればいいなと思っていますけれども。利用があれば十分ペイできますので。
【記者】　例えば、県のほうに要望なり何なりいうことですか。
【市長】　そのとおりです。
【記者】　ありがとうございます。
【広報広聴課長】　ほかにございませんか。
ないようですので、次の次第に入りたいと思います。
次第の３番目、フリーの質疑応答に移りたいと思います。これにつきましても、最初に幹事社のほうから質問を賜りたいと思います。
【記者】　先日、処分場の連絡協議会が市に対して要望書を持って申し入れに来たと。私の記憶している限りでは、具体的にそういう行動というのを、市に対して公の場で行ったというのは多分初めてだと思います。佐上部長も大きな前進であるというふうにとらえているというふうにおっしゃっていましたけれども、市長としては、まずああいう要望がでてきたということをどうとらえているかというのが１点と、同じ要望書を県に対しても提出しようとしたけれども受け取らなかったと、県は実質上そういう協議というのは拒否しているという状況です。
あの後、協議会が、要するに記者会見というか、敦賀の記者クラブに対していろいろ説明した中でやっぱり言っていたのは、８対２の問題と３分の１、３分の２の問題であると。８対２を決めたとき、市長は県側と協議なさった当事者だと思いますので、県が今そういう対応をとっていることについてどう思うかという、この２点をお答えいただきたいと思います。
【市長】　まず第１点目。やはり、今まで全く、言い方は悪いかもしれませんけれども聞く耳は持たないという形の団体の皆さん方でしたけれども、やはり環境省からの指導をいただいたり、またそれなりに、冒頭に、私どものごみがこちらに大変ご迷惑をかけましたという陳謝の言葉までいただきまして、私どもは本当にこういう問題がお互いの理解が少しずつ進んで前進したなということで高く評価をいたしております。私どもは、しっかりとまたそういう協議の場を持っていきたいなというふうに思っております。
そこで、県のほうでは、そういう要望はやはり受けていただいて、テーブルに着いて、いろんな説明をしていただきたいなと、私は思っている一人でありますので、また県のほうとも十分私どもも連絡をとりながら、この問題については１歩でも２歩でも前進してまいりましたので、もっとその先に進みますように努力をしていきたい、このように思っております。
【記者】　今の件、追加ですけれども、県に対して敦賀市のほうから、ぜひそのテーブルに着いてくださいという要望はなさるおつもりかということと、要望書の項目自体には負担額の見直しとかいうような明記はなくて負担の是正という文言なんですけれども、やはりその後の取材のやりとりの中では、最終的にはそういうところに行くのではないかというふうに記者としては思っています。
ただ、やっぱり今まで、いわゆる環境省の見解に沿ってきちんと払ってきている団体もあるわけで、その枠組みを根底から直すということは、多分、相当政治的なコストを払うといいますか、労力が今まで以上にかかるのではないかなと思うんですけれども、そのあたり市長はどういうご見解ですか。
【市長】　県に対しては、今……。部長のほうから言うたほうがいいかな。ちょっと今、部長が。昨日、行ったときの話を。
【市民生活部長】　じゃ、私のほうから。県とのその後の話なんですが、実は、昨日２時から３時半ごろまで協議をさせていただきました。その中で、我々のほうとしての敦賀市の考え方を述べさせていただきまして、当然、協議会の団体の皆さん方につきましては、２対８の負担割合についても理解、市民に対する説明責任がある。ですから、その８対２になったことの説明を県にも求めたいとおっしゃっているので、県さんは当然、当事者である福井県でありますので、説明会には出て説明する責任がありますよと。そしてまた、関係する府県、60団体の府県、福井県を除きまして17都道府県、この府県が環境省の指導

のもと、協議を60団体に対して、要するに指導、助言といったようなことに対して汗をかいている最中でございます。そういったことから考えても、当事者である福井県が出て協議するのは当然の責務だと思いますということで、昨日は話してきました。ところが、県のほうからは昨日は明確な回答が、クリアな回答が得られなかったという状況でございます。
【記者】　２番目のほうは、要するに負担額の見直しということになっても、そう簡単には応じられないのではないですかという。
【市長】　これは、もう既に払っていただいております団体の皆さん方いらっしゃいますので、そこを変えるということは難しいと思います。やはりその支払い方法といいますか、今自治体も大変それぞれが財政的に厳しいときでありますので、できるだけ負担をしやすい形、そういうものはやはりこれから相談もさせていただきながら前進するようにしていきたいと思っています。
【記者】　部長に確認したいんですが、昨日は部長と県側はどなたが応対されたんですか。
【市民生活部長】　県のほうの循環社会推進課の課長、それと参事、それから総括主任、そして担当、４名でございます。我々のほうは、私と廃棄物対策課の政策幹、そして主幹、３名で参りました。
【記者】　明確な答えを得られなかったのは、どういう文言だったわけですか。
【市民生活部長】　私も、ちょっとクリアにここで説明するような答えが得られなかったということで、県のはっきりしたお答えを聞かせていただきたいということを言ったんですが、今現在は、とりあえずは敦賀市と協議会のほうで話をしてくださいとおっしゃいましたので、じゃ、その後、県さんのほうが協議会から再度要望があった場合はお出になるお気持ちはあるんですねと聞きましたところ、ゼロではございませんというような回答でございました。
【記者】　じゃ、１点、最後、市長、改めて県に一言。
【市長】　ようやく前進をしてきたところでありますので、ぜひ協力をいただいて、この問題の解決にお力をいただきたいと思います。
【記者】　今のごみの問題の続きのような話なんですが、８月にも協議会と協議の場を設けるというような話があったと思うんですが、それは県抜きで、市と協議会で東京で行うということなんでしょうか。
【市民生活部長】　福井県のほうには、昨日、そういうふうに話をさせてもらいまして、今度、環境省のほうへ私ども出向かせていだたきまして相談をさせていだたきます。
　当然、環境省さんのほうにもオブザーバーとして出ていただくという気持ちでおりますので、それで環境省さんの都合もあるでしょうけれども、我々排出団体の協議会と先般お話しした中では、やはりまず、なるべく早いうちにできたら８月中にしたいですねということで話はしていたということでございます。ただ、環境省のほうと話をして若干ずれる可能性もあるでしょうけれども、なるだけ気持ちとしてはそういう気持ちでいますということでございます。
【広報広聴課長】　それでは、各社、フリーの質問になります。質問事項がありましたら挙手をお願いいたしたいと思います。
【記者】　今の話なんですけれども、８月中というのは県も入らなければ開けないものですか。例えば、県はまず説得に時間がかかりそうだとなった場合は、県だけ抜いて先に先行して協議を進めるということにはなりにくいんでしょうか。
【市民生活部長】　私らとしては、例えば、日程が決まった段階でそこに県のほうが理解が得られなくても、県が出なくても我々としては協議会のほうとお話しする場を設けたいというふうに思っております。
【副市長】　そういう選択肢はありますけれども、なるべくはやっぱり歩調を合わせてやっていきたいんです。だけど、なかなかそういう歩調が合わないなら今うちの部長が言ったような選択肢もあり得ます。
【記者】　８月30日に選挙になるということで、自民党も民主党もマニフェストを出してまいりましたけれども、市長はすべて目を通してないかもしれないですけれども、出てきたということで、いろいろ新聞報道なんかも出てきていますけれども、それぞれ見比べて

いるかどうかわからないですけれども、まずどう思いますか。
【市長】　それぞれが今の厳しい社会状況を考えながら、特に子育て、教育等に力を入れていただいておりますので、今の時代に合ったマニフェストを掲げておられるなというふうに思いました。
【記者】　このような形でマニフェスト、どういうことを政権とったらやるかというふうな選挙にだんだん変わりつつあるということに関してはどう思いますか。
【市長】　昔、マニフェスト、何かイタリア語らしいですけれども、公約ということで公な約束事ですから、これは昔から選挙にはつきものといいますか、そういうものがあったというふうに記憶をしております。マニフェストになりますと、ある程度の年月といいますか、そういう期間も設定をしてやるということで。ただ、私どもの立場でいろいろ市政運営をやっておりますと、そういうふうに気持ちはあってもいろんな事情、社会情勢が変化すると間に合わない場合もありますし、早くできる場合もありますので、そのマニフェスト選挙というのも、もちろん今の時代に合って大事なものでしょうし、また選ぶ側になれば、それをちゃんと実行していただけるということを条件に皆さん投票されるので、昔の公約とは少し意味の違う形ですけれども、今の時代には合っているんじゃないかなと思います。
【記者】　その中でなんですけれども、自民党と民主党がマニフェストを出してきて、民主党、自民党等も原子力のことについて、自民党は原子力の発電比率を25.6から40％、発電所の設備利用率を58から84％と強化するというふうに言っていて、一方、民主党のほうは、市長がよく言われるように、安全を第一にして、今度は事故とかトラブルを減らすための仕組みづくりとして品質保証型のそういうシステムをつくっていこうとしているんですけれども、敦賀というと原子力というふうに思われるので、そういうふうに打ち出したことについて、どっちを支持するかとはなかなか言えないとは思うんですけれども、ここのことに関してはどう思われるかかという。
【市長】　今までですと、原子力というともう賛成か反対かというようなイメージの選挙が多かったと思うんです。原子力を推進するということがはもう反対だと。今、両党のほうでは、極めてやはり原子力というのは大事であるということがまず認識をされておりますので、そのあたりは両党とも評価できるのかなというふうに思います。
　安全というのは、自民党さんもそういうふうに書いてないでしょうけれども、これはもう基本中の基本ですので、どなたが原子力に対する思いを語られても、安全であり、安心であるものはもう当然そこにあって、その後、稼働率をどうするかという話だというふうに私は思っております。
【記者】　そうしますと、民主党さんが言われるようなことに加えて、一番最初の文言に原子力発電所の事故を重く受けとめると。原子力に対する国民の信頼回復に努めるとまず最初にうたっていて、品質保証の仕組みをつくっていくというのはどう思いますか。
【市長】　それもいいことだと思います。
【記者】　マニフェストに関連して、道州制が結構しっかり書かれるようになってきまして、橋下さんの動きもあって、多分、自民党なんかもしっかり道州制ということを打ち出していると思うんですけれども、一方で西川さんが反対しているということもあるんですが、やっぱり嶺南の首長として、これほど争点になっている以上、この問題について一体どうお考えで、どうしていくべきなのかというところをちょっと教えてもらえますか。
【市長】　これも議会のほうでもよく出ていた話で、私は個人的には道州制というのは、やはりこれからの時代を考えていけば、前に進めていくべきだというふうに思っている一人です。そのためには、これだけ、1,800ぐらいになりましたけれども、市町村がもう少し規模を大きくしていかなくてはいけないなということも感じておりますし、そういう点で知事の立場は、やはり県知事としての立場であいう判断をされておられるんでしょうけれども、私は、個人的には道州制というのは将来進めていく中で、自民党のマニフェストの中には明確に2017年までに道州制を進めるということが入っておりましたので、それはそれとして評価する部分はあるというふうに思います。
　ただ、これは一首長といいましても、私はやはり市民の代表者でありますので、市民の皆さん方がどう考えるかということをまず把握をして、そして自分の個人の思いとは相反

する部分が出た場合には、やはり多くの市民の皆さん方の意見に従っていきたいと思っています。
【記者】　関連して。若狭町長の森下さんなんかは、嶺南１市構想みたいなのを結構言っていまして、規模を大きくしようという一つの考え方なのかなとも思うんですけれども、じゃ、首長としてこれからそういう新たな合併とか、道州制を踏まえてどのくらいの規模の自治体を目指していくのか。そこら辺について何かビジョンとか見通しみたいなことはありますか。
【市長】　これは個人的な思いですけれども、先ほど言いましたように、道州制というのは、やはり進めていかなくちゃならん一つのあり方だと思いますから、そうなると自治体を大きくしていく。私も嶺南１市構想というのはもう相当前から出まして、当時の助役会などでも検討したりしてきておるんですけれども、ただ、住民といいますか、地域の皆さん方はそれほど感じていないのが現実です。恐らく敦賀の市民の皆さん方も合併といいましても、へぇと言うぐらいの人が多いと思うんです。私どももいろんなところへ顔を出しますけれども、合併をせなあかんとか、そんな話は聞いたことがないものですか、議会でも余り出ていないのが現状です。
　そうなると、非常に地域住民の関心は低いし、私ども行政の立場の中で手を振り、旗を振り、さあ道州制をどうのこうの、また市町村合併をどうのこうのというのは非常に言いにくい現況でもありますので、そのあたりは、こちらからもっと市民の皆さん方に投げかけをして、合併についてどう思いますかとか、また道州制についてもどう思いますかというような、そういうような場づくりもしながら、いろんな意見が聞ける、そういうような場づくりもしなくちゃならんなということも感じております。
　そういうことを経て、やはり合併等についても将来的には嶺南１市もありますし、実は道州制になってきますと、滋賀県の湖西、湖北の皆さん方も、なるならもう嶺南と一緒になって琵琶湖があり、若狭湾がある、水があり、山があり、そういう地域をつくろうじゃないかという話も現にいろんな席で出ておりまして、私ども海湖の森共同宣言というのを実は福滋県境交流促進協議会の中でうたっております。遠い将来の夢という部分も含まれておりますが、そういう意味では、福井県、もう道州制になれば福井県も何もありませんから、それを超えた１つの大きな合併なども視野に入れたビジョンというのは持っていきたい。これからつくっていって、先ほど申しましたように、説明をしなくちゃなりませんので、そういうような段階に少しずつ入ってきたのかなということは感じています。
【記者】　今のお話の確認でもないですけれども、西川知事がいつまで知事をやっているかわからないですけれども、例えば、嶺北はほうっておいて、嶺南だけで滋賀県なり関西と一緒になるという話というのは、市長の中ではどのぐらいありますか。夢なり何なり。
【市長】　非常に困った質問をしますね。
　それは、昔、そんなことをちらっと言ったこともありますけれども、やはり福井県というのは一緒になって、昔、話をすると、うちは滋賀県の時代も敦賀県の時代もありましたし、100年以上前の話ですけれども、それと、文化的にも確かに嶺北とは違います。もう言葉が、イントネーションが違いますし、そういう意味で、そういうところはありますけれども、でも福井県になってもう100年以上たちますし、福井県の中の一員として今頑張ってきておりますから。恐らく嶺北の皆さん方も、例えば道州制の中でどういうふうに分かれるかとなると、もしそれなら関西のほうがいいんじゃないかと思っている人もたくさんいると思うんです。だから無理やり切り離すということは考えんでもいいんじゃないかなと思っています。
【記者】　市長が昔ちらっと言ったことをちょっと思い出していただきたいんですけれども、大体２年ぐらい前だったと思いますが、私が道州制のことを質問しました。道州制のことを考えた場合、やっぱり北陸州なのか、近畿州、もしくは関西州なのか、北陸信越州になるのかわからないですけれども、市長、枠組みをどうお考えですかという私が質問をしたときに、福井という枠組みを超えて、個人的にはやはり昔からつながりのある滋賀県の湖北、湖西部と一緒になることが望ましいと思っているとご回答なさった記憶が私にはありますけれども、今はその点どうお考えですか。
【市長】　それはそれなりの歴史的なものを見て、文化的なことを見れば、どちらかとい

うと、私は余り標準語しゃべりませんけれども、東京へ行ったら絶対に関西の人やねと言われます。学生時分もそうやったんですけれども、行って、向こうでしゃべったら、あなた関西の人でしょうと言われるイントネーションなんです。この敦賀を含めて嶺南地域というのは。それだけの文化圏でもっていますから。そういう意味はありますけれども、先ほど言いました、福井県としてもう100年以上一緒になってやってきておりますので、前言いましたのは、どうしてもあかんと、もうどうしてもと言うんなら、そういうときはやむを得ずということは言いましたけれども、今は雰囲気的にそういうことも余りありませんので、福井県は一つということで頑張っていきたいなと思います。

【記者】　あとそれと、いわゆる南北問題のうちの一つに、選挙の争点の中で、やっぱり今新幹線の問題というのはどうしてもどの陣営も言っていて、民主と自民の話になってしまいますけれども、今応酬をやっているじゃないですか。市長は当然、いつも新幹線のことをおっしゃっていますけれども、その両陣営に対して新幹線のことで要望しておきたいことというのはどういうことがありますか。

【市長】　民主党さんも新幹線については反対もしていないというように思いますし、進めるべきだということは聞いておりますので、両陣営どちらになられても、やはり新幹線を一日も早く、大阪方面にどのような形になるかということも今議論が始まろうとしておりますので、ぜひ政策の中で取り入れていだたいて、この新幹線が敦賀まで来る、そして大阪までつながるという政策は引き続いて十分に取り組んでいただきたいというふうに、両陣営にお願いしたいと思います。

【記者】　ならば、よしんばと言うとあれかもしれませんが、福井駅部までがつながると。敦賀駅部の建設というのが認可されるとして、そこまで来ると、これまでずっと一枚岩かどうかはわからないですけれども、一丸となって取り組んできた福井県の中でも、じゃ、その先の敦賀から大阪までどう接続するかということが、いわゆる議題に上ってきてしまうと思うんです。やっぱり若狭地方の皆さんは、それこそ若狭ルートだろうと、閣議決定もしているという意見はあるかと思うんですけれども、以前、また市長は米原のほうが現実的なんじゃないかという意見をおっしゃっていたと思います。今、どうお考えですか。

【市長】　基本的には嶺南地域の皆さん方の全部がどうしても若狭ルートでなければならんということもありません。そういう皆さんもいらっしゃいますけれども、ほかの政治課題のほうに行ったほうがいいんじゃないかという指摘する人もおりますので、まだそのあたりは具体的にこうだということが決まっていませんので議論をする段階ではありませんけれども、事業費の問題とか、また亀山を抜けていく京都のルートよりも米原のほうが現実的には。

私、前も言いましたけれども、今の雷鳥なりサンダーバードでも、京都で８割ぐらい降りるんです。皆さん一遍乗ってみられるとわかりますけれども、特急に乗って大阪行きの電車で８割、京都で降りるんです。ということは、新幹線がもし来ても、亀山のところ抜けてもし行って、亀山からまた30分もかけて動くというとあんまり。やはりできれば湖西のところから京都に入るか、米原から入る、いろんなルートがありましょうけれども、入ったほうが現実的にはいいんかなというふうに僕は個人的に感じたものですから。そうなると事業費も安くなる。

ただ、東海道新幹線でも非常に乗り入れが厳しいということもありますし、よっぽどダイヤをさわっていかなあかんということもありますので、そのあたりは技術的なことは私もわかりませんが、一利用する者から見ると、そっちのほうがいいんかなというふうに今感じております。

それと、滋賀県の皆さん方とも話をする中で、もう米原のほうへつなぐのも一つだよという、近辺の自治体の皆さん方にもじかに話を聞いたことがありますので。例えば滋賀県、通るだけでどうもならんと、そんなんと言うのとはまたちょっと違いますので。

それと、湖西回りにしても、結局、あそこは上へ上がった場合の風対策が非常に問題で、今の在来特急でも風吹いては止まって、そこに新幹線行って止まっておったら新幹線の意味がありませんから、そういうことも考えるとそれが一般的かなというふうに考えますけれども、それは私、勝手に思っていることで、決して何も決まっておりませんので。

【記者】　自民党がマニフェストを出して、2005年の政策を自民党が振り返って、各団体

とかが評価をしておりますけれども、市長自身は、なかなか答えにくいとは思いますけれども、どのようにお考えでしょうか。
【市長】　それなりに、例えば私どもの市長会とかそういうところからはそういう話は出てなかったですか。各団体の中に入っていませんでしたか。市長会は出していませんね。また、市長会で話を取りまとめたら意見を出してみます。
【広報広聴課長】　ほかに質問がないようですので、８月の定例記者会見はこれにて終わりにさせていただきます。
　ありがとうございました。
【市長】　どうもありがとうございました。

午後２時14分　終了